

同志社大学  
2023 年度卒業論文

論題: 登校回避感情と不登校行動の要因  
— 『不登校現象の社会学』 からの変化—

学生 ID:1109201002

氏名:浅野 琴美

指導教員:立木 茂雄

(本文の総文字:23121 文字)

学籍番号：1109201002

氏名：浅野 琴美

## 要旨

本稿では、不登校児童の人数が10年連続で増加し、コロナ禍で問題が再注目されている社会問題の一つである不登校の問題について、その要因を明らかにすること、また、森田(1991)の『不登校現象の社会学』の調査時から現在にかけての変化について明らかにすることを目的として研究を行った。調査では、森田の研究をもとに、独立変数と従属変数設定し、68名の回答集めた。結果として、現代の不登校問題でも「登校回避感情を示す出席生徒」のようなグレイゾーンの存在に着目する重要性があることが明らかになり、また、登校回避感情や不登校行動の要因の結果から、森田の研究をさらに補強できた。そして、学校に対する義務感のゆらぎの変化をはじめとした知見や学校に関連するポジティブな感情の経験の有無と不登校現象との関係を新たに明らかにすることができた。一方で本稿では、いじめと不登校現象の関係を明らかにできなかったというような不十分な点もあり、今後の研究で、いじめと不登校現象との関係には、森田の調査時点からどのような変化があるのかについて、新たな知見が発見されることが期待された。

キーワード： 登校回避感情 不登校現象 不登校行動

## 目次

1	はじめに	1
2	方法	2
3	結果	6
3.1	単純集計	6
3.2	クロス集計	14
	(1) 中学2年時のプラス経験と不登校行動との関連	14
	(2) 中学2年時のマイナス経験と不登校行動との関連	21
	(3) 学校への義務感と不登校行動との関連	27
	(4) 親との距離感と不登校行動との関連	27
	(5) 先生との距離感と不登校行動との関連	28
	(6) 友達との距離感と不登校行動との関連	29
4	考察	30
5	結論	33
6	文献	34

## 1 はじめに

文部科学省の調査により、「令和4年度の国立、公立、私立の小・中学校の不登校児童生徒数が約29万9千件（過去最多）、うち学校内外で相談を受けていない児童生徒数が約11万4千人（過去最多）、うち90日以上欠席している児童生徒数が約5万9千人（過去最多）、小・中・高・特別支援学校におけるいじめの認知件数が約68万2千件（過去最多）、うち重大事態の発生件数が923件（過去最多）等の結果」が明らかになり、現在「不登校」は大きな社会問題の一つとなっている（文部科学省 2023a）。文部科学省による不登校児童の人数の推移をみると、不登校児童は10年連続で増加しており、中学校における不登校児童生徒数は平成14年には10万5383人であったのが、令和4年には19万3936人まで増加している（文部科学省 2023b）。コロナ禍において、不登校について改めて注目されニュースで報道されていたことも記憶に新しいだろう。

この「不登校」の問題について、日本では文部科学省により、1950年頃から長期欠席児童の調査を本格的に行い、取り扱われてきた。そのなかで1950年代の終わり頃から、長期欠席理由に「学校が嫌い」「疾病異常」の占める割合が増加しはじめたことにより、長期欠席児童の問題に心理学的な側面からとらえられはじめ、徐々に社会的な視点からも研究がなされはじめた。この不登校の背景は小柴の論文のなかで、「花谷・橋(2004)によれば、我が国の不登校に関する研究は、『第1期(1960年～1969年)；本人および家庭に要因を求める時期』『第2期(1970年～1984年)；学校に要因を求める時期』『第3期(1985年～1997年)；要因の特定が不可能となる時期』と変遷している。」というような過程を経て、不登校の要因について研究がなされてきたとされる（小柴 2017:43）。このような不登校研究の中で、代表的な研究のひとつとして、森田洋司(1991)の『不登校現象の社会学』がある。森田の研究では、それまで学校に行かない（行けない）児童に対して、登校拒否という言葉が使用されてきていたことに対して、それを批判し「不登校」という言葉を用いて、「不登校とは、生徒本人ないしはこれを取り巻く人々が、欠席並びに遅刻・早退などの行為に、対して妥当な理由に基づかない行為として、動機を構成する現象である」とこれまでの登校拒否問題を定義した(森田 1991:14-15)。また、森田の研究では、登校拒否という現象に線引きによって漏れるために、統計では把握できない暗数部分に着目し、欠席はしないが遅刻早退をしている児童や、「がまんして登校」している不登校の潜在群のようなグレイゾーンの存在を問題視したことが大きな特徴であった(森田 1991)。この森田(1991)の研究のなかで、1989年3月10日～3月24日に中学2年生5934人を対象に調査がなされ、出席群（登校回避感情のない出席生徒・登校回避感情を示す出席生徒）と不登校群（欠席だけの不登校生・遅刻早退だけの不登校生徒・欠席と遅刻早退を示す不登校生徒）と各要因との関係が明らかにされた。

本研究では、この調査をふまえて、調査時である1989年から、不登校児童の人数の最多の記録を更新していく現在では、どのような変化があるのかについて明らかにしたい。また、森田(1991)の研究では、登校回避感情の要因として、マイナス感情の状況経験を要因としたものが多かった。そこで本稿では、そのマイナス感情の状況要因と反対となるプラス感情の状況経験と不登校問題とでは、どのような関係があるのかについて明らかにしていきたい。

## 2 方法

調査は質問紙調査形式で Google Forms にて、2023 年 11 月 30 日から 2023 年 12 月 10 日まで行った。

はじめにフェース項目として、性別(男/女/その他・回答しない)・年齢・学校区分(公立/私立)を尋ねる三問を設定した。

次に、森田(1991)の調査を基にして独立変数と従属変数となる質問項目を作成した。それぞれの質問は本調査対象が中学生ではなかったため、質問文を過去形に変化させ、当時の状況を尋ねる形式に変更した。まず、従属変数として、登校回避感情の有無を尋ねるため、「問 5.あなたは、中学 2 年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありましたか。」「1. よくあった。2. 時々あった。3. たまにはあった。4. 全く無かった。」という項目、不登校行動を尋ねるため「問 7. 前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどうしましたか。」「1. それでも一度も休んだことはなかった。2. 遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。3. 休んだことがあった。4. 遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。」という項目、欠席日数を尋ねるため「問 9.学校へ行くのが嫌で休んだのは、中学 2 年生のころ、合計で何日ぐらいありましたか。」という項目を森田(1991)の調査票から引用し設定した。

そして、独立変数として、中学二年時に経験したマイナス的な感情を、森田(1991)の質問項目から、「問 6.あなたが中学 2 年生のころ、経験したことのある感情について、あてはまるものすべてを選択してください。」「1.友達とうまくいかなかった。2.友達にいじめられた。3.精神的にショックなことがあった。4.学校が怖い不安だった。5.学校で誰もかまってくれなかった。6.人と話すのが嫌だった。7.先生と上手くいかなかった。8.先生がひどく叱った。9.勉強がしたくなかった。10.授業がわからなかった。11.眠い、体がだるかった。12.朝になると学校に行けなかった。13.病気がちだった。14.家庭の事情。15.仲間から誘われた。16.学校の外に面白いことがあった。17.親と離れたくなかった。18.その他(自由記入)」という問を設定した。そしてこのようなマイナス感情の対となるプラスの感情を経験した場合を測定するため、問 6 の反対となる質問文を考え、「問 4.あなたが中学 2 年生のころ、経験したことのある感情についてあてはまるものすべてを選択してください。」「1.友達と良い関係を築けていた。2.友達と会うことが楽しみだった。3.学校で嬉しい出来事があった。4.学校は楽しかった。5.学校にはよく話しかけてくれる人がいた。6.人と話すことが好きだった。7.先生とはよい関係を築けていた。8.先生は自分を支えてくれていた。9.勉強がしたかった。10.授業がよくわかった。11.学校には面白いことがあった。12.親と離れたかった。13.その他(自由記入)」という質問項目を設けた。さらに独立変数として、親との距離感をはかるために、森田(1991)より「問 10.中学 2 年生のころ、お父さんと一緒に居るとなんとなく安心できると思っていましたか。」「1. そう思っていた。2. どちらかといえばそう思っていた。3. どちらかといえばそうは思わなかった。4. そうは思わなかった。」という項目と、「問 11. 中学 2 年生のころ、お母さんと一緒に居るとなんとなく安心できると思っていましたか。」「1. そう思っていた。2. どちらかといえばそう思っていた。3. どちらかといえばそうは思わなかった。4. そうは思わなかった。」という項目を設定した。また、先生との距離感をはかるために森田(1991)より、「問 12.中学 2 年生のころ、休み時間や放課後にあなたは先生

と話をしたり、遊んだりすることはありましたか？」「1. よくあった。2. 時々あった。3. あまりなかった。4. 全くなかった。」と「問 13. 中学 2 年生のころ、あなたは担任の先生とどのような付き合い方をしていましたか？」「1. 自分の個人的な悩みまで打ち明けたり、相談できるような関係だった。2. 悩みの相談はしないが、勉強のことなどでは相談する関係だった。3. 相談するほどではないが、気軽に話をする関係だった。4. 挨拶する程度の関係だった。5. できるなら話をすることは避けたかった。」という質問と回答選択肢を作成した。同様に友達との距離感をはかるために森田(1991)より、「問 14. 中学 2 年生のころの休み時間、あなたはどのように過ごす事が多かったですか？近いと思う方を選んでください。」「1. 特に親しい人だけでなく、割と多くの人と話をしたり、遊ぶことの方が多かった。2. 少人数の近い人たちだけで何かをしていることの方が多かった。3. 一人だけで過ごすことの方が多かった。4. その他」と「問 15. 中学 2 年生のころ、あなたは友達だと思っている人と、どのような付き合い方をしていますか？」「1. お互いに悩んでいることなどを打ち明けたり、相談し合ったりしていた。2. 悩みを打ち明けたりすることはないが、よく遊んだり話をしたりしていた。3. 付き合いはするけれども、特に親しいとは言えない付き合い方をしていた。4. できるなら付き合いたくはないが、仕方がなく付き合っていた。5. 友達として付き合い合っている人はいなかった。」という項目を設けた。また加えて、いじめとの関係をはかるために森田(1991)より「問 16. あなたのクラスで中学二年生になってからいじめがありましたか？」「1. あった。2. なかった。」という質問項目と回答選択肢を作成し、この問 16 の質問に対して「1. あった。」と回答した場合にのみ、「問 17. その時、あなたはどのようにしていましたか。」1. いじめられた。2. いじめられたが、いじめもした。3. いじめた。4. 面白がって見ていた。5. 止めようとした。6. 何もしなかった。」という質問項目を表示し、回答を募集した。

表 1 に質問票として、構成概念、質問項目、回答選択肢をまとめたものを示す。

表 1 質問票

構成概念	質問項目	回答選択肢
性別	あなたの性別を教えてください。	1.男 2.女 3.その他・回答しない
年齢	あなたの年齢をお答えください。	
学校区分	あなたが通っていた中学校は公立の学校でしたか？私立でしたか？	1.公立 2.私立
中 2 時の経験: プラス要因	あなたが中学 2 年生のころ、経験したことがある感情についてあてはまるものすべてを選択してください。	1.友達と良い関係を築けていた。 2.友達と会うことが楽しみだった。 3.学校で嬉しい出来事があった。 4.学校は楽しかった。 5.学校にはよく話しかけてくれる人がいた。 6.人と話すことが好きだった。

		<p>7.先生とはよい関係を築けていた。</p> <p>8.先生は自分を支えてくれていた。</p> <p>9.勉強がしたかった。</p> <p>10.授業がよくわかった。</p> <p>11.学校には面白いことがあった。</p> <p>12.親と離れたかった。</p> <p>13.その他(自由記入)</p>
登校回避感情	あなたは、中学2年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありますか。	<p>1. よくあった。</p> <p>2. 時々あった。</p> <p>3. たまにはあった。</p> <p>4. 全く無かった。</p>
中2時の経験:マイナス要因	あなたが中学2年生のころ、経験したことのあがる感情について、あてはまるものすべてを選択してください。	<p>1.友達とうまくいかなかった。</p> <p>2.友達にいじめられた。</p> <p>3.精神的にショックなことがあった。</p> <p>4.学校が怖い不安だった。</p> <p>5.学校で誰もかまってくれなかった。</p> <p>6.人と話すのが嫌だった。</p> <p>7.先生と上手くいかなかった。</p> <p>8.先生がひどく叱った。</p> <p>9.勉強がしたくなかった。</p> <p>10.授業がわからなかった。</p> <p>11.眠い、体がだるかった。</p> <p>12.朝になると学校に行けなかった。</p> <p>13.病気がちだった。</p> <p>14.家庭の事情。</p> <p>15.仲間から誘われた。</p> <p>16.学校の外に面白いことがあった。</p> <p>17.親と離れたくなかった。</p> <p>18.その他(自由記入)</p>
不登校行動	前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどうしましたか。	<p>1. それでも一度も休んだことはなかった。</p> <p>2. 遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。</p> <p>3. 休んだことがあった。</p> <p>4. 遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。</p>
学校への義務感	中学校2年生のころ、あなたは遅刻・早退・欠席についてどのように考えていましたか。	<p>1.欠席・遅刻・早退するのはよくないと思っていた。</p> <p>2.どうしても欠席・遅刻・早退したいのなら、しても仕方がないと思っていた。</p> <p>3.欠席・遅刻・早退したいときは、そうして当然</p>

		だと思っていた。 4.特に何も思わなかった。 5.その他
不登校行動	学校へ行くのが嫌で休んだのは、中学2年生のころ、合計で何日ぐらいありましたか。	
親との距離感:父	中学2年生のころ、お父さんと一緒に居るとなんとなく安心できると思っていましたか。	1. そう思っていた。 2. どちらかといえばそう思っていた。 3. どちらかといえばそうは思わなかった。 4. そうは思わなかった。
親との距離感:母	中学2年生のころ、お母さんと一緒に居るとなんとなく安心できると思っていましたか。	1. そう思っていた。 2. どちらかといえばそう思っていた。 3. どちらかといえばそうは思わなかった。 4. そうは思わなかった。
先生との距離感:休み時間	中学2年生のころ、休み時間や放課後にあなたは先生と話をしたり、遊んだりすることはありましたか？	1. よくあった。 2. 時々あった。 3. あまりなかった。 4. 全くなかった。
先生との距離感:付き合い方	中学2年生のころ、あなたは担任の先生とどのような付き合い方をしていましたか？	1. 自分の個人的な悩みまで打ち明けたり、相談できるような関係だった。 2. 悩みの相談はしないが、勉強のことなどでは相談する関係だった。 3. 相談するほどではないが、気軽に話をする関係だった。 4. 挨拶する程度の関係だった。 5. できるなら話をすることは避けたかった。
友達との距離感:休み時間	中学2年生のころの休み時間、あなたはどのように過ごす事が多かったですか？近いと思う方を選んでください。	1. 特に親しい人だけでなく、割と多くの人と話をしたり、遊ぶことの方が多かった。 2. 少人数の近しい人たちだけで何かをしていることの方が多かった。 3. 一人だけで過ごすことの方が多かった。 4.その他
友達との距離感:付き合い方	中学2年生のころ、あなたは友達だと思っている人と、どのような付き合い方をしていますか？	1. お互いに悩んでいることなどを打ち明けたり、相談し合ったりしていた。 2. 悩みを打ち明けたりすることはないが、よく遊んだり話をしたりしていた。 3. 付き合いはするけれども、特に親しいとは言えない付き合い方をしていた。



		4. できるなら付き合いたくはないが、仕方がなく付き合っていた。 5. 友達として付き合っている人はいなかった。
いじめ:有無	あなたのクラスで中学二年生になってからいじめがありましたか?	1.あった。 2.なかった。
いじめ:自身の立場	その時、あなたはどのようにしていましたか。	1.いじめられた。 2.いじめられたが、いじめもした。 3.いじめた。 4.面白がって見ていた。 5.止めようとした。 6.何もしなかった。

### 3 結果

#### 3.1 単純集計

本調査に対して68名の回答を得ることができた。年齢は18歳から29歳までであり、中学二年生として学校に在籍していたのは、2008年から2019年頃であると推定される。年齢の平均値は21.62歳で中央値は21.50歳、標準偏差は1.893であった。回答数のうち、女性は77.9% (53名) で男性は22.1% (15名) であった。また、在籍していた中学校の区分は、私立中学校が38.2% (26名)、公立中学校が61.8%(42名)である。「問4.あなたが中学2年生のころ、経験したことがある感情についてあてはまるものすべてを選択してください。」の回答については表2のような結果になり、「2.友達と会うことが楽しみだった。」があてはまる人が最も多く53名(77.9%)、次いで「1.友達と良い関係を築けていた」が52名(76.5%)、「4.学校は楽しかった」を経験していた人は50名(73.5%)であった。

表2 問4. 中学2年生のころの経験の結果

問4. あなたが中学2年生のころ、経験したことがある感情についてあてはまるものすべてを選択してください。	
1.友達と良い関係を築けていた。	52(76.5%)
2.友達と会うことが楽しみだった。	53(77.9%)
3.学校で嬉しい出来事があった。	39(57.4%)
4.学校は楽しかった。	50(73.5%)
5.学校にはよく話しかけてくれる人がいた。	47(69.1%)
6.人と話すことが好きだった。	41(60.3%)
7.先生とはよい関係を築けていた。	32(47.1%)
8.先生は自分を支えてくれていた。	22(32.4%)
9.勉強がしたかった。	15(22.1%)

10.授業がよくわかった。	23(33.8%)
11.学校には面白いことがあった。	42(61.8%)
12.親と離れたかった。	7(10.3%)
13.その他(自由記入)	1(1.5%)

「問 5.あなたは、中学 2 年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありましたか。」に対しては、表 3 に表した結果となり、「1. よくあった。」が 7 名「2. 時々あった。」が 23 名「3. たまにはあった。」22 名、「4. 全く無かった。」と回答した人は 16 名であった。すなわち、頻度の多少はあれ、登校回避感情を経験したことがあった人は、回答選択肢の「1. よくあった。」「2. 時々あった。」「3. たまにはあった。」を選んだ人を合計して 53 名で、全体のうち 76.5%いることがわかった。森田(1991)の調査では、全体の 70.8%であったことと比較すると、母数の違い等考慮せねばならない点はあるものの、登校回避感情の経験がある人が増加していることが明らかになった。

表 3 登校回避感情の経験有無についての度数分布表

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	よくあった。	7	10.3	10.3	10.3
	時々あった。	23	33.8	33.8	44.1
	たまにはあった。	22	32.4	32.4	76.5
	全く無かった。	16	23.5	23.5	100.0
	合計	68	100.0	100.0	

「問 6.あなたが中学 2 年生のころ、経験したことがある感情について、あてはまるものすべてを選択してください。」では、どの回答選択肢もあてはまらなかった人が 4 名いたとされるため、回答総数は 64 件であった。結果は表 4 の通りであり、回答選択肢のうち「11. 眠い、体がだるかった。」があてはまっていた人が最も多く 38 名(55.9%)、次いで「1. 友達とうまくいかなかった。」が 29 名(42.6%)、「9.勉強がしたくなかった。」という感情を経験したことがある人が 3 番目に多くは 26 名(38.2%)であった。また「18.その他(自由記入)」として「部活動の先輩が怖くて部活に行くのが億劫だった。」という回答があった。森田の調査では、「問 5.あなたは、中学 2 年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありましたか。」で「1. よくあった。」「2. 時々あった。」「3. たまにはあった。」と回答をした人のみに対して、「学校が嫌になったのはどういう理由からでしょうか。」と質問していたため、質問が少し異なっているが、結果の比較を行ってみた。森田(1991)では、「眠い・体がだるい」がほかの回答選択肢と大きく差をつけて最も多く、「勉強したくない」が二番目、「友達とうまくいかない。」が三番目に多いという結果であり、回答数の差が異なるものの最もあてはまる人が多かった回答選択肢 3 つは同様で、本調査と近い結果であった。

表4 問6. 中学2年生のころの経験の結果

問6.あなたが中学2年生のころ、経験したことがある感情について、あてはまるものすべてを選択してください。	
1.友達とうまくいかなかった。	29(45.3%)
2.友達にいじめられた。	5(7.8%)
3.精神的にショックなことがあった。	13(20.3%)
4.学校が怖い不安だった。	4(6.3%)
5.学校で誰もかまってくれなかった。	1(1.6%)
6.人と話すのが嫌だった。	4(6.3%)
7.先生と上手くいかなかった。	4(6.3%)
8.先生がひどく叱った。	7(10.9%)
9.勉強がしたくなかった。	26(40.6%)
10.授業がわからなかった。	8(12.5%)
11.眠い、体がだるかった。	38(59.4%)
12.朝になると学校に行けなかった。	7(10.9%)
13.病気がちだった。	2(3.1%)
14.家庭の事情。	1(1.6%)
15.仲間から誘われた。	4(6.3%)
16.学校の外に面白いことがあった。	7(10.9%)
17.親と離れたくなかった。	2(3.1%)
18.その他(自由記入)	1(1.6%)

「問7.前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどうしましたか。」についても、質問が前問である「問6.あなたが中学2年生のころ、経験したことがある感情について、あてはまるものすべてを選択してください。」を前提とした問いであることも関係して、回答数は65件であった。回答は表5の通りで、「1.それでも一度も休んだことはなかった。」が最も多く38名(58.5%)、「2.遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。」が8名(12.3%)、「3.休んだことがあった。」が13名(20%)、「4.遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。」が6名(9.2%)であった。「問6.あなたが中学2年生のころ、経験したことがある感情について、あてはまるものすべてを選択してください。」の回答選択肢にあげたマイナスな感情を経験をしたときに、41.5%の人が不登校行動をとっていたことが明らかになった。これは森田(1991)の調査結果でも、「2.遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。」「3.休んだことがあった。」「4.遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。」という回答選択肢を選んだ人の合計は35.6%であり、大きな差といえるは変化はしていないが、森田の調査を上回る数値であり、マイナスな状況や感情を経験した際に実際に行動に移す人が増加しているのではないかと考えることができた。

表5 問7. 不登校行動の結果

		不登校行動			
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	それでも一度も休んだことはなかった。	38	55.9	58.5	58.5
	遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。	8	11.8	12.3	70.8
	休んだことがあった。	13	19.1	20.0	90.8
	遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。	6	8.8	9.2	100.0
	合計	65	95.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	4.4		
合計		68	100.0		

「問8. 中学校2年生のころ、あなたは遅刻・早退・欠席についてどのように考えていましたか。」に対する回答では、「1. 欠席・遅刻・早退するのはよくないと思っていた。」が二番目に多く22名(32.4%)、「2. どうしても欠席・遅刻・早退したいのなら、しても仕方がないと思っていた。」が最も多く32名(47.1%)「3. 欠席・遅刻・早退したいときは、そうして当然だと思っていた。」が5名(7.4%)「4. 特に何も思わなかった。」が9名(13.2%)であり、表6にも結果について示した。森田(1991)の調査では、この質問は「問7. 前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどうしましたか。」に対して「2. 遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。」「3. 休んだことがあった。」「4. 遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。」のいずれかを回答した人へのみ、その時の気持ちを尋ねる形式で問われていた。その際は、「よくないと思いつつ欠席(遅刻・早退)した。」が50%と最も多く、「どうしても欠席(遅刻・早退)したかったのだから仕方がない。」が17.7%「欠席(遅刻・早退)したいときは、そうして当然だと思った。」が5.4%「特に何も思わなかった」26.9%であった(森田1991)。この結果は「3. 欠席・遅刻・早退したいときは、そうして当然だと思っていた。」という内容の回答の割合は近いが、ほかの回答選択肢は本調査の結果と大きく異なっていた。

表6 問8. 学校への義務感の結果

		学校への義務感			
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	欠席・遅刻・早退するのはよくないと思っていた。	22	32.4	32.4	32.4
	どうしても欠席・遅刻・早退したいのなら、しても仕方がないと思っていた。	32	47.1	47.1	79.4
	欠席・遅刻・早退したいときは、そうして当然だと思っていた。	5	7.4	7.4	86.8
	特に何も思わなかった。	9	13.2	13.2	100.0
	合計	68	100.0	100.0	

「問9. 学校へ行くのが嫌で休んだのは、中学2年生のころ、合計で何日ぐらいありましたか。」においては、0日と回答した人が40名、1日が3名、2～3日が8名、5～7日が2名10日が10名、14～15日が3名、欠損値が1名であった。長期間欠席したという回答数が少なかったため、欠席を1日以上したことがある人を「欠席あり」0日の人を「欠席なし」というように、二つに分類した。分類すると、中学2年生時欠席した日数という項目に対して、「欠席あり」と回答した人は27名(39.7%)、「欠席なし」と回答した人は41名(60.3%)であり、表7の通りである。「問5.あなたは、中学2年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありますか。」に対する回答とともに考えると、森田も焦点をあてていたグレイゾーンにいる生徒、すなわち「登校回避感情を示す出席生徒」は約25名いると推定できた。

表7 問9. 欠席日数の結果

		欠席日数の有無			
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	欠席あり	27	39.7	40.3	40.3
	欠席なし	40	58.8	59.7	100.0
	合計	67	98.5	100.0	
欠損値	システム欠損値	1	1.5		
合計		68	100.0		

「問10. 中学2年生のころ、お父さんと一緒に居るとなんとなく安心できると思っていましたか。」では、「1. そう思っていた。」が19名(27.9%)「2. どちらかといえばそう思っていた。」が20名(29.4%)「3. どちらかといえばそうは思わなかった。」が17名(25.0%)「4. そうは思わなかった。」が12名(17.6%)であり、結果を表8に示した。回答選択肢で「4. そうは思わなかった。」と回答した人はやや少ないが、それぞれの回答選択肢に対する回答数にあまり差がないという特徴があった。

表8 問10. 親との距離感: 父の結果

		親との距離感: 父			
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思っていた。	19	27.9	27.9	27.9
	どちらかといえばそう思っていた。	20	29.4	29.4	57.4
	どちらかといえばそうは思わなかった。	17	25.0	25.0	82.4
	そうは思わなかった。	12	17.6	17.6	100.0
	合計	68	100.0	100.0	

「問 11. 中学 2 年生のころ、お母さんと一緒に居るとなんとなく安心できると感じていましたか。」に対する関係では、「1. そう思っていた。」が 36 名 (52.9%) 「2. どちらかといえばそう思っていた。」が 24 名 (35.3%) 「3. どちらかといえばそうは思わなかった。」が 4 名 (5.9%)、「4. そうは思わなかった。」が 4 名 (5.9%) であり、結果を表 9 に示した。程度の多少はあるが、お母さんと一緒にいるとなんとなく安心できると感じていた人は合計で 60 名(88.2%)と、安心できないと思っていた人の数と大きく差が出た。

表 9 問 11. 親との距離感:母の結果

		親との距離感:母			
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そう思っていた。	36	52.9	52.9	52.9
	どちらかといえばそう思っていた。	24	35.3	35.3	88.2
	どちらかといえばそうは思わなかった。	4	5.9	5.9	94.1
	そうは思わなかった。	4	5.9	5.9	100.0
	合計	68	100.0	100.0	

「問 12. 中学 2 年生のころ、休み時間や放課後にあなたは先生と話をしたり、遊んだりすることはありましたか？」では、表 10 の通りであり、「1. よくあった。」17 名 (25.0%) 「2. 時々あった。」18 名 (26.5%) 「3. たまにはあった。」18 名 (26.5%) 「4. 全く無かった」15 名 (22.1%) となった。森田(1991)の調査では、「よくある」が 3.9% 「ときどきある」が 18.1% 「あまりない」が 36.4% 「まったくない」が 41.5% であったことと比較すると(森田 1991)、今回の調査では「3. たまにはあった。」が少なくほかは同程度の割合であるため大きく割合が異なり、森田の調査から現代にかけて変化があり、先生との距離感が近くなっていることと考えられた。

表 10 問 12. 先生との距離感:休み時間

		先生との距離感:休み時間			
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	よくあった。	17	25.0	25.0	25.0
	時々あった。	18	26.5	26.5	51.5
	たまにはあった。	18	26.5	26.5	77.9
	全く無かった。	15	22.1	22.1	100.0
	合計	68	100.0	100.0	

「問 13. 中学 2 年生のころ、あなたは担任の先生とどのような付き合い方をしていましたか？」への回答は、表 11 の通りで、「1. 自分の個人的な悩みまで打ち明けたり、相談できるような関係だった。」6 名(8.8%)「2. 悩みの相談はしないが、勉強のことなどでは相談する関係だった。」5 名(7.4%)「3. 相談するほどではないが、気軽に話をする関係だった。」33 名(48.5%)「4. 挨拶する程度関係だった。」20 名(29.4%)「5. できるなら話をすることは避けたかった。」4 名(5.9%) だった。この割合は森田(1991)の調査とそれほど変化はなかった。

表 11 問 13. 先生との距離感: 付き合い方

先生との距離感: 付き合い方		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	自分の個人的な悩みまで打ち明けたり、相談できるような関係だった。	6	8.8	8.8	8.8
	悩みの相談はしないが、勉強のことなどでは相談する関係だった。	5	7.4	7.4	16.2
	相談するほどではないが、気軽に話をする関係だった。	33	48.5	48.5	64.7
	挨拶する程度関係だった。	20	29.4	29.4	94.1
	できるなら話をすることは避けたかった。	4	5.9	5.9	100.0
	合計	68	100.0	100.0	

「問 14. 中学 2 年生のころの休み時間、あなたはどのように過ごす事が多かったですか？近いと思う方を選んでください。」においては、表 12 に示したように「1. 特に親しい人だけでなく、割と多くの人と話をしたり、遊ぶことの方が多かった。」が 22 名(32.4%)「2. 少人数の近い人たちだけで何かをしていることの方が多かった」が 45 名(66.2%)「3. 一人だけで過ごすことの方が多かった。」は最も少なく 1 名(1.5%)であった。

表 12 問 14. 友人との距離感: 休み時間

友達との距離感: 休み時間		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	特に親しい人だけでなく、割と多くの人と話をしたり、遊ぶことの方が多かった	22	32.4	32.4	32.4
	人数の近い人たちだけで何かをしていることの方が多かった	45	66.2	66.2	98.5
	一人だけで過ごすことの方が多かった。	1	1.5	1.5	100.0
	合計	68	100.0	100.0	

「問 15. 中学 2 年生のころ、あなたは友達だと思っている人と、どのような付き合い方をしていましたか？」では、表 15 に示した結果の通り「1. お互いに悩んでいることなどを打ち明けたり、相談し合ったりしていた。」と回答した人が 28 名（41.2%）「2. 悩みを打ち明けたりすることはないが、よく遊んだり話をしたりしていた。」と回答した人が 34 名（50.0%）、「3. 付き合いはするけれども、特に親しいとは言えない付き合い方をしていた。」と回答した人が 6 名（8.8%）となり、「4. できるなら付き合いたくはないが、仕方がなく付き合っていた。」「5. 友達として付き合い合っている人はいなかった。」と回答した人は 0 名だった。

表 13 問 15. 友人との距離感: 付き合い方

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	お互いに悩んでいることなどを打ち明けたり、相談し合ったりしていた。	28	41.2	41.2	41.2
	悩みを打ち明けたりすることはないが、よく遊んだり話をしたりしていた。	34	50.0	50.0	91.2
	付き合いはするけれども、特に親しいとは言えない付き合い方をしていた。	6	8.8	8.8	100.0
	合計	68	100.0	100.0	

「問 16. あなたのクラスで中学 2 年生のころ、いじめがありましたか？」に対する回答は、表 14 に示した通り、「1. あった。」が 24 名（35.3%）「2. なかった。」44 名（64.7%）となった。

表 14 問 16. いじめ: 有無

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	あった。	24	35.3	35.3	35.3
	なかった。	44	64.7	64.7	100.0
	合計	68	100.0	100.0	



「問 17.その時、あなたはどのようにしていましたか。」については、「問 16.あなたのクラスで中学2年生のころ、いじめがありましたか？」において「1. あった」と回答した人が24名だったため、回答総数は24件であった。「6.何もしなかった。」という回答が最も多くほかの選択肢の回答数と大きく差をつけて14名(58.3%)「1. いじめられた。」が3名(12.5%)「2.いじめられたが、いじめもした。」が2名(8.3%)「3.いじめた。」が1名(4.2%)「4.面白がって見ていた。」が1名(4.2%)、「7.その他」が3名(12.5%)であった。「7.その他」の回答としては、「その子と仲良くした。」「いじめまでではないが、ハブリが多かった。自分もハブられたし、ハブったこともある。クラス全体がグループの行き来が多いイメージがある。」「いじめられている子と、今まで通り接した。」というような回答があった。表15に「問 17.その時、あなたはどのようにしていましたか。」に対する回答を示す。

表 15 問 17.いじめ:自身の立場

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	いじめられた。	3	4.4	12.5	12.5
	いじめられたが、いじめもした。	2	2.9	8.3	20.8
	いじめた。	1	1.5	4.2	25.0
	面白がって見ていた。	1	1.5	4.2	29.2
	何もしなかった。	14	20.6	58.3	87.5
	その他	3	4.4	12.5	100.0
	合計	24	35.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	44	64.7		
合計		68	100.0		

### 3.2 クロス集計

#### (1) 中学2年時のプラス経験と不登校行動との関連

次に各独立変数と従属変数である「問 5.あなたは、中学2年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありましたか。」「問 7.前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどのようにしましたか。」「問 9. 学校へ行くのが嫌で休んだのは、中学2年生のころ、合計で何日ぐらいありましたか。」の項目とのクロス集計を行った。分析を行い、有意だったものを示していく。まず、「問 4.あなたが中学2年生のころ、経験したことがある感情についてあてはまるものすべてを選択してください。」の回答選択肢の各項目を「経験しなかった」と「経験した」に分類し、従属変数とクロス集計分析を行った。「中2時の経験:友達と良い関係を築けていた」と「登校回避感情の経験有無」についてクロス集計分析を行うと、カイ二乗検定の結果、「中2時の経験:友達と良い関係を築けていた」によって「登校回避感情の経験有無」に有意な差があった。表16に「中2時の経験:友達と良い関係を築けていた」と「登校回避感情の経験有無」のクロス集計分析の結果を示す。具体的には、「中2時の経験:友達と良い関係を築けていた」を経験した場合について、登校回避感情を経験しない傾向にあった。 $(\chi^2(1) = 8.416, p < 0.036)$ 。

表16 「友達と良い関係を築けていた」と「登校回避感情の経験有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		登校回避感情の経験有無			
		よくあ った。	時々あっ た。	たまには あった。	全く無か った。
中2時の経験：友達と 良い関係を築けていた	経験しな かった	3	9	3	1
	経験した	4	14	19	15
合計		7	23	22	16

「中2時の経験：友達と良い関係を築けていた」と「不登校行動」についてもクロス集計分析を行うと、カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：友達と良い関係を築けていた」によって「不登校行動」には有意な差があった。表17に「中2時の経験：友達と良い関係を築けていた」と「不登校行動」のクロス集計分析の結果を示す。具体的には、「中2時の経験：友達と良い関係を築けていた」を経験した場合について、不登校行動を欠席行動をとりにくく、経験していない場合は欠席行動をとる傾向にあった ( $\chi^2(1)=7.609, p<0.056$ )。

表17 「友達と良い関係を築けていた」と「不登校行動」クロス結果

**クロス表**

度数

		不登校行動				合計
		それでも一度も休 んだことはなかつ た。	遅刻や早退をし たことがあるが、 休まなかった。	休んだことがあ った。	遅刻や早退をし たこともあるし、 休んだこともあ った。	
中2時の経験：友達と良い関係 を築けていた	経験しなかつ た	7	1	7	1	16
	経験した	31	7	6	5	49
合計		38	8	13	6	65

「中2時の経験：友達と会うことが楽しみだった」と「欠席日数の有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：友達と会うことが楽しみだった」によって「欠席日数の有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：友達と会うことが楽しみだった」を経験しなかった場合について、欠席日数がある場合が増加する傾向にあった ( $\chi^2(1)=5.585, p<0.020$ )。表18に「中2時の経験：友達と会うことが楽しみだった」と「欠席日数の有無」のクロス集計分析の結果を示しておく。

表18 「友達と会うことが楽しみだった」と「欠席日数の有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		欠席日数の有無		合計
		欠席あり	欠席なし	
中2時の経験：友達と会うことが 楽しみだった	経験しなかつ た	10	5	15
	経験した	17	36	53
合計		27	41	68

「中2時の経験：学校でうれしい出来事があった」と「不登校行動」についてクロス集計分析を行った。表19に「中2時の経験：学校でうれしい出来事があった」と「不登校行動」のクロス集計分析の結果を示す。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：学校でうれしい出来事があった」によって「不登校行動」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：学校でうれしい出来事があった」を経験した場合は、欠席をしにくい傾向にあり、経験していない場合は、欠席や遅刻早退かつ欠席をする傾向にあった ( $\chi^2(1)=10.630, p<0.011$ )。

表19 「学校でうれしい出来事があった」と「不登校行動」クロス結果

**クロス表**

度数

		不登校行動				合計
		それでも一度も休んだことはなかった。	遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。	休んだことがあった。	遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。	
中2時の経験：学校でうれしい出来事があった	経験しなかった	11	3	10	4	28
	経験した	27	5	3	2	37
合計		38	8	13	6	65

また、「中2時の経験：学校でうれしい出来事があった」と「欠席日数の有無」についてもクロス集計分析を行うと、カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：学校でうれしい出来事があった」によって「欠席日数の有無」に有意な差があった。表20に「中2時の経験：学校でうれしい出来事があった」と「欠席日数の有無」のクロス集計分析の結果を示す。具体的には、「中2時の経験：学校でうれしい出来事があった」を経験した場合について、「欠席なし」が増加する傾向にあり ( $\chi^2(1)=13.516, p<0.001$ )、前述の不登校行動との分析もあわせて、「学校でうれしい出来事があった。」という経験があると、不登校行動を減少することをさらに明らかにできた。

表20 「学校でうれしい出来事があった」と「欠席日数の有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		欠席日数の有無		合計
		欠席あり	欠席なし	
中2時の経験：学校でうれしい出来事があった	経験しなかった	19	10	29
	経験した	8	31	39
合計		27	41	68

また、「中2時の経験：学校は楽しかった」と「登校回避感情の経験有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：学校は楽しかった」によって「登校回避感情の経験有無」に有意な差があった。表21に「中2時の経験：学校は楽しかった」と「登校回避感情の経験有無」のクロス集計分析の結果を示す。具体的には、中学2年生時に「学校は楽しかった。」という感情を経験した場合について、登校回避感情を経験が少なくなり、反対に「学校は楽しかった。」という感情を経験していない場合は登校回避感情を経験しやすい傾向にあった ( $\chi^2(1)=12.223, p<0.006$ )。

表21 「学校は楽しかった」と「登校回避感情の経験有無」クロス結果

クロス表

度数		登校回避感情の経験有無				合計
		よくあった。	時々あった。	たまにはあった。	全く無かった。	
中2時の経験：学校は楽しかった	経験しなかった	5	8	4	1	18
	経験した	2	15	18	15	50
合計		7	23	22	16	68

「中2時の経験：学校は楽しかった」と「不登校行動」についてもクロス集計分析を行った。表22に「中2時の経験：学校は楽しかった」と「不登校行動」のクロス集計分析の結果を示す。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：学校は楽しかった」によって「不登校行動」に有意な差があった。具体的には中学2年生時に「学校は楽しかった。」という感情を経験した場合について、不登校行動において欠席行動が減少する傾向にあり、反対に経験していない場合には、欠席行動が増加する傾向があった ( $\chi^2(1)=10.257, p<0.015$ )。

表22 「学校は楽しかった」と「不登校行動」クロス結果

クロス表

度数		不登校行動				合計
		それでも一度も休んだことはなかった。	遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。	休んだことがあった。	遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。	
中2時の経験：学校は楽しかった	経験しなかった	5	2	7	3	17
	経験した	33	6	6	3	48
合計		38	8	13	6	65

そして、「中2時の経験：学校は楽しかった」と「欠席日数の有無」についてクロス集計分析を行った。表23に「中2時の経験：学校は楽しかった」と「欠席日数の有無」のクロス集計分析の結果を示す。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：学校は楽しかった」によって「欠席日数の有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：学校は楽しかった」を経験していない場合について、「欠席あり」が増加する傾向にあった（ $\chi^2(1)=10.426, p<0.002$ ）。中学2年生に「学校は楽しかった。」と経験するか否かは、登校回避感情・不登校行動・欠席日数のすべてと有意な差があり、不登校現象の要因の一つであることが確かだと考えられた。

表23 「学校は楽しかった」と「欠席日数の有無」クロス結果

**中2時の経験：学校は楽しかったと欠席日数の有無のクロス表**

度数

		欠席日数の有無		合計
		欠席あり	欠席なし	
中2時の経験：学校は楽しかった	経験しなかった	13	5	18
	経験した	14	36	50
合計		27	41	68

「中2時の経験：学校にはよく話しかけてくれる人がいた」と「不登校行動」についてクロス集計分析を行った。表24に「中2時の経験：学校にはよく話しかけてくれる人がいた」と「不登校行動」のクロス集計分析の結果を示す。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：学校にはよく話しかけてくれる人がいた」によって「不登校行動」に有意な差があった。具体的には、中学2年生のころ「学校にはよく話しかけてくれる人がいた。」という経験していない場合について、不登校行動において欠席行動が増える傾向にあった（ $\chi^2(1)=7.606, p<0.051$ ）。

表24 「学校にはよく話しかけてくれる人がいた」と「不登校行動」クロス結果

**クロス表**

度数

		不登校行動				合計
		それでも一度も休んだことはなかった。	遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。	休んだことがあった。	遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。	
中2時の経験：学校にはよく話しかけてくれる人がいた	経験しなかった	8	2	8	2	20
	経験した	30	6	5	4	45
合計		38	8	13	6	65

「中2時の経験：学校にはよく話しかけてくれる人がいた」と「欠席日数の有無」についてもクロス集計分析を行うと、カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：学校にはよく話しかけてくれる人がいた」と「欠席日数の有無」に有意な差があった。表25に「中2時の経験：学校にはよく話しかけてくれる人がいた」と「欠席日数の有無」のクロス集計分析の結果を示す。具体的には、「中2時の経験：学校にはよく話しかけてくれる人がいた」を経験しない場合について、「欠席あり」となる傾向にあった ( $\chi^2(1)=12.320, p<0.001$ )。「学校にはよく話しかけてくれる人がいた。」という経験は、不登校行動とのクロス集計もふまえて、さらに経験の有無が欠席行動の差になることが明らかになった。

表25 「学校にはよく話しかけてくれる人がいた」と「欠席日数の有無」クロス結果

中2時の経験：学校にはよく話しかけてくれる人がいたと欠席日数の有無のクロス表

度数		欠席日数の有無		合計
		欠席あり	欠席なし	
中2時の経験：学校にはよく話しかけてくれる人がいた	経験しなかった	15	6	21
	経験した	12	35	47
合計		27	41	68

「中2時の経験：人と話すことが好きだった」と「登校回避感情の経験有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：人と話すことが好きだった」によって「登校回避感情の経験有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：人と話すことが好きだった」を経験した場合について、登校回避感情を経験をしない傾向にあった ( $\chi^2(1)=8.343, p<0.037$ )。表26は「中2時の経験：人と話すことが好きだった」と「登校回避感情の経験有無」のクロス集計分析の結果を示したものである。

表26 「人と話すことが好きだった」と「登校回避感情の経験有無」クロス結果

クロス表

度数		登校回避感情の経験有無				合計
		よくあった。	時々あった。	たまにはあった。	全く無かった。	
中2時の経験：人と話すことが好きだった	経験しなかった	6	10	7	4	27
	経験した	1	13	15	12	41
合計		7	23	22	16	68



「中2時の経験：人と話すことが好きだった」と「欠席日数の有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：人と話すことが好きだった」によって「欠席日数の有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：人と話すことが好きだった」という感情を経験した場合について、「欠席なし」になった（ $\chi^2(1)=6.758, p<0.012$ ）。「中2時の経験：人と話すことが好きだった」と「登校回避感情の経験有無」の結果と合わせて、人と話すことが好きか否かは不登校現象を左右する変数であることがわかった。表27に「中2時の経験：人と話すことが好きだった」と「中2時の経験：人と話すことが好きだった」と「欠席日数の有無」のクロス集計分析の結果を示しておく。

表27 「人と話すことが好きだった」と「欠席日数の有無」クロス結果

**中2時の経験：人と話すことが好きだったと欠席日数の有無のクロス表**

度数

		欠席日数の有無		合計
		欠席あり	欠席なし	
中2時の経験：人と話すことが好きだった	経験しなかった	16	11	27
	経験した	11	30	41
合計		27	41	68

「中2時の経験：先生とは良い関係を築けていた」と「不登校行動」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：先生とは良い関係を築けていた」によって「不登校行動」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：先生とは良い関係を築けていた」を経験した場合について、不登校行動で「それでも一度も休んだことはなかった。」が多く、欠席行動をとらない傾向にあった（ $\chi^2(1)=7.478, p<0.059$ ）。表28は「中2時の経験：先生とは良い関係を築けていた」と「不登校行動」のクロス集計分析の結果を示したものである。

表28 「先生とは良い関係を築けていた」と「不登校行動」クロス結果

**クロス表**

度数

		不登校行動				合計
		それでも一度も休んだことはなかった。	遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。	休んだことがあった。	遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。	
中2時の経験：先生とは良い関係を築けていた	経験しなかった	17	3	11	4	35
	経験した	21	5	2	2	30
合計		38	8	13	6	65

「中2時の経験: 先生とは良い関係を築けていた」と「欠席日数の有無」についてクロス集計分析を行った。表 29 に「中2時の経験: 先生とは良い関係を築けていた」と「欠席日数の有無」のクロス集計分析の結果を示す。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験: 先生とは良い関係を築けていた」によって「欠席日数の有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験: 先生とは良い関係を築けていた」を経験した場合について、「欠席なし」となる傾向にあった ( $\chi^2(1)=10.519, p<0.002$ )。「中2時の経験: 先生とは良い関係を築けていた」と「不登校行動」の結果も併せて、「先生とは良い関係を築けていた」という経験の有無が欠席行動を左右することが明らかになった。

表 29 「先生とは良い関係を築けていた」と「欠席日数の有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		欠席日数の有無		合計
		欠席あり	欠席なし	
中2時の経験: 先生とは良い関係を築けていた	経験しなかった	21	15	36
	経験した	6	26	32
合計		27	41	68

「中2時の経験: 先生は自分を支えてくれていた」と「欠席日数の有無」についてクロス集計分析を行った。表 30 に「中2時の経験: 先生は自分を支えてくれていた」と「欠席日数の有無」のクロス集計分析の結果を示す。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験: 先生は自分を支えてくれていた」によって「欠席日数の有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験: 先生は自分を支えてくれていた」を経験した場合について、「欠席なし」となることがわかった ( $\chi^2(1)=5.741, p<0.030$ )。

表 30 「先生は自分を支えてくれていた」と「欠席日数の有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		欠席日数の有無		合計
		欠席あり	欠席なし	
中2時の経験: 先生は自分を支えてくれていた	経験しなかった	23	23	46
	経験した	4	18	22
合計		27	41	68



「中2時の経験:学校には面白いことがあった」と「欠席日数の有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験:学校には面白いことがあった」によって「欠席日数の有無」に有意な差があった。表31に「中2時の経験:学校には面白いことがあった」と「欠席日数の有無」のクロス集計分析の結果を示す。具体的には、「中2時の経験:学校には面白いことがあった」を経験した場合について、「欠席なし」が多くなる傾向にあった ( $\chi^2(1)=5.343, p<0.025$ )。

表31 「学校には面白いことがあった」と「欠席日数の有無」クロス結果

**クロス表**

度数		欠席日数の有無		合計
		欠席あり	欠席なし	
中2時の経験:学校には面白いことがあった	経験しなかった	15	11	26
	経験した	12	30	42
合計		27	41	68

(2) 中学2年時のマイナス経験と不登校行動との関連

次に「問6.あなたが中学2年生のころ、経験したことのある感情について、あてはまるものすべてを選択してください。」の回答選択肢を先ほどと同様に「経験しなかった」と「経験した」に分類しクロス集計分析を行った。「中2時の経験:友達と上手くいかなかった」と「登校回避感情の経験有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験:友達と上手くいかなかった」と「登校回避感情の経験有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験:友達と上手くいかなかった」を経験した場合について、登校回避感情を経験をしやすい傾向にあった ( $\chi^2(1)=18.905, p<0.001$ )。表32は「中2時の経験:友達と上手くいかなかった」と「登校回避感情の経験有無」のクロス集計分析の結果を示したものである。

表32 「友達と上手くいかなかった」と「登校回避感情の経験有無」クロス結果

**クロス表**

度数		登校回避感情の経験有無				合計
		よくあった。	時々あった。	たまにはあった。	全く無かった。	
中2時の経験:友達と上手くいかなかった	経験しなかった	2	7	15	15	39
	経験した	5	16	7	1	29
合計		7	23	22	16	68

「中2時の経験：友達と上手くいかなかった」と「不登校行動」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：友達と上手くいかなかった」によって「不登校行動」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：友達と上手くいかなかった」を経験した場合について、不登校行動において遅刻や早退、欠席をする傾向にあった ( $\chi^2(1)=9.228, p<0.023$ )。表33に「中2時の経験：友達と上手くいかなかった」と「不登校行動」のクロス集計分析の結果を示しておく。

表33 「友達と上手くいかなかった」と「不登校行動」クロス結果

**クロス表**

度数

		不登校行動				合計
		それでも一度も休んだことはなかった。	遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。	休んだことがあった。	遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。	
中2時の経験：友達と上手くいかなかった	経験しなかった	24	1	6	5	36
	経験した	14	7	7	1	29
合計		38	8	13	6	65

「中2時の経験：友達にいじめられた」と「登校回避感情の経験有無」についてクロス集計分析を行った。表34に「中2時の経験：友達にいじめられた」と「登校回避感情の経験有無」のクロス集計分析の結果を示す。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：友達にいじめられた」によって「登校回避感情の経験有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：友達にいじめられた」を経験した場合について、登校回避感情を経験をしやすい傾向にあった ( $\chi^2(1)=16.030, p<0.003$ )。

表34 「友達にいじめられた」と「登校回避感情の経験有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		登校回避感情の経験有無				合計
		よくあった。	時々あった。	たまにはあった。	全く無かった。	
中2時の経験：友達にいじめられた	経験しなかった	4	21	22	16	63
	経験した	3	2	0	0	5
合計		7	23	22	16	68

「中2時の経験：精神的にショックなことがあった」と「登校回避感情の経験有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：精神的にショックなことがあった」によって「登校回避感情の経験有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：精神的にショックなことがあった」を経験した場合について、登校回避感情を経験をしやすい傾向にあった $\chi^2(1)=13.663, p<0.004$ 。表35に「中2時の経験：精神的にショックなことがあった」と「登校回避感情の経験有無」のクロス集計分析の結果を示しておく。

表35 「精神的にショックなことがあった」と「登校回避感情の経験有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		登校回避感情の経験有無				合計
		よくあった。	時々あった。	たまにはあった。	全く無かった。	
中2時の経験：精神的にショックなことがあった	経験しなかった	3	16	20	16	55
	経験した	4	7	2	0	13
合計		7	23	22	16	68

「中2時の経験：学校が怖い不安だった」と「登校回避感情の経験有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：学校が怖い不安だった」によって「登校回避感情の経験有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：学校が怖い不安だった」を経験した場合について、登校回避感情を経験をしやすい傾向にあった $(\chi^2(1)=7.678, p<0.077)$ 。表36に「中2時の経験：学校が怖い不安だった」と「登校回避感情の経験有無」のクロス集計分析の結果を示しておく。

表36 「学校が怖い不安だった」と「登校回避感情の経験有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		登校回避感情の経験有無				合計
		よくあった。	時々あった。	たまにはあった。	全く無かった。	
中2時の経験：学校が怖い不安だった	経験しなかった	5	22	21	16	64
	経験した	2	1	1	0	4
合計		7	23	22	16	68

「中2時の経験: 人と話すのが嫌だった」と「不登校行動」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験: 人と話すのが嫌だった」によって「不登校行動」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験: 人と話すのが嫌だった」を経験した場合について、「遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。」が多くなった ( $\chi^2(1)=9.902, p<0.022$ )。表 37 に「中2時の経験: 人と話すのが嫌だった」と「不登校行動」のクロス集計分析の結果を示す。

表 37 「人と話すのが嫌だった」と「不登校行動」クロス結果

**クロス表**

度数

		不登校行動				合計
		それでも一度も休んだことはなかった。	遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。	休んだことがあった。	遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。	
中2時の経験: 人と話すのが嫌だった	経験しなかった	37	7	13	4	61
	経験した	1	1	0	2	4
合計		38	8	13	6	65

「中2時の経験: 先生と上手くいかなかった」と「登校回避感情の経験有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験: 先生と上手くいかなかった」によって「登校回避感情の経験有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験: 先生と上手くいかなかった」を経験した場合について、登校回避感情を経験をしやすい傾向にあった ( $\chi^2(1)=8.021, p<0.054$ )。表 38 に「中2時の経験: 先生と上手くいかなかった」と「登校回避感情の経験有無」のクロス集計分析の結果を示す。

表 38 「先生と上手くいかなかった」と「登校回避感情の経験有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		登校回避感情の経験有無				合計
		よくあった。	時々あった。	たまにはあった。	全く無かった。	
中2時の経験: 先生と上手くいかなかった	経験しなかった	5	23	21	15	64
	経験した	2	0	1	1	4
合計		7	23	22	16	68

「中2時の経験：授業がわからなかった」と「登校回避感情の経験有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：授業がわからなかった」によって「登校回避感情の経験有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：授業がわからなかった」を経験した場合について、登校回避感情を経験をしやすい傾向にあった $\chi^2(1)=7.348, p<0.076$ 。表39に「中2時の経験：授業がわからなかった」と「登校回避感情の経験有無」のクロス集計分析の結果を示す。

表39 「授業がわからなかった」と「登校回避感情の経験有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		登校回避感情の経験有無				合計
		よくあった。	時々あった。	たまにはあった。	全く無かった。	
中2時の経験：授業がわからなかった	経験しなかった	4	21	20	15	60
	経験した	3	2	2	1	8
合計		7	23	22	16	68

「中2時の経験：眠い、体がだるかった」と「不登校行動」についてクロス集計分析を行った。表40に「中2時の経験：眠い、体がだるかった」と「不登校行動」のクロス集計分析の結果を示す。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：眠い、体がだるかった」によって「不登校行動」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：眠い、体がだるかった」を経験した場合について、不登校行動において遅刻や早退、欠席が増える傾向にあった ( $\chi^2(1)=8.733, p<0.031$ )。

表40 「眠い、体がだるかった」と「不登校行動」クロス結果

**クロス表**

度数

		不登校行動				合計
		それでも一度も休んだことはなかった。	遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。	休んだことがあった。	遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。	
中2時の経験：眠い、体がだるかった	経験しなかった	21	2	4	0	27
	経験した	17	6	9	6	38
合計		38	8	13	6	65

「中2時の経験: 眠い、体がだるかった」と「欠席日数の有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験: 眠い、体がだるかった」と「欠席日数の有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験: 眠い、体がだるかった」を経験しなかった場合について、「欠席なし」が多くなる傾向にあった( $\chi^2(1)=41.196$   $p<0.049$ )。表41は「中2時の経験: 眠い、体がだるかった」と「欠席日数の有無」のクロス集計分析の結果を示したものである。

表41 「眠い、体がだるかった」と「欠席日数の有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		欠席日数の有無		合計
		欠席あり	欠席なし	
中2時の経験: 眠い、体がだるかった	経験しなかった	8	22	30
	経験した	19	19	38
合計		27	41	68

「中2時の経験: 朝になると学校に行けなかった」と「登校回避感情の経験有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験: 朝になると学校に行けなかった」によって「登校回避感情の経験有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験: 朝になると学校に行けなかった」を経験した場合について、登校回避感情を経験しやすい傾向にあった( $\chi^2(1)=6.410$ ,  $p<0.082$ )。表42に「中2時の経験: 朝になると学校に行けなかった」と「登校回避感情の経験有無」のクロス集計分析の結果を示しておく。

表42 「朝になると学校に行けなかった」と「登校回避感情の経験有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		登校回避感情の経験有無				合計
		よくあった。	時々あった。	たまにはあった。	全く無かった。	
中2時の経験: 朝になると学校に行けなかった	経験しなかった	5	19	21	16	61
	経験した	2	4	1	0	7
合計		7	23	22	16	68

「中2時の経験：朝になると学校に行けなかった」と「不登校行動」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：朝になると学校に行けなかった」によって「不登校行動」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：朝になると学校に行けなかった」を経験した場合について、不登校行動において遅刻や早退、遅刻早退かつ欠席行動が増え、反対に経験していない場合「それでも一度も休んだことはなかった。」が多くなる傾向にあった ( $\chi^2(1)=19.746, p<0.001$ )。表 43 に「中2時の経験：朝になると学校に行けなかった」と「不登校行動」のクロス集計分析の結果を示しておく。

表 43 「朝になると学校に行けなかった」と「不登校行動」クロス結果

**クロス表**

度数

		不登校行動				合計
		それでも一度も休んだことはなかった。	遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。	休んだことがあった。	遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。	
中2時の経験：朝になると学校に行けなかった	経験しなかった	37	5	13	3	58
	経験した	1	3	0	3	7
合計		38	8	13	6	65

「中2時の経験：病気がちだった」と「不登校行動」についてクロス集計分析を行った。表 44 に「中2時の経験：病気がちだった」と「不登校行動」のクロス集計分析の結果を示す。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：病気がちだった」によって「不登校行動」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：病気がちだった」を経験しなかった場合について、「それでも一度も休んだことはなかった。」となった ( $\chi^2(1)=14.702, p<0.021$ )。

表 44 「病気がちだった」と「不登校行動」クロス結果

**クロス表**

度数

		不登校行動				合計
		それでも一度も休んだことはなかった。	遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。	休んだことがあった。	遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。	
中2時の経験：病気がちだった	経験しなかった	38	6	13	6	63
	経験した	0	2	0	0	2
合計		38	8	13	6	65



「中2時の経験：親と離れたくなかった」と「登校回避感情の経験有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「中2時の経験：親と離れたくなかった」によって「登校回避感情の経験有無」に有意な差があった。具体的には、「中2時の経験：親と離れたくなかった」を経験した場合について、登校回避感情の経験をしにくい傾向にあった ( $\chi^2(1)6.697, p < 0.062$ )。表45に「中2時の経験：親と離れたくなかった」と「登校回避感情の経験有無」のクロス集計分析の結果を示しておく。

表45 「親と離れたくなかった」と「登校回避感情の経験有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		登校回避感情の経験有無				合計
		よくあった。	時々あった。	たまにはあった。	全く無かった。	
中2時の経験：親と離れたくなかった	経験しなかった	7	23	22	14	66
	経験した	0	0	0	2	2
合計		7	23	22	16	68

### (3)学校への義務感と不登校行動との関連

さらに、「学校への義務感」をはかる「問8.中学校2年生のころ、あなたは遅刻・早退・欠席についてどのように考えていましたか。」と「欠席日数の有無」についてクロス集計分析を行った。表46に「学校への義務感」と「欠席日数の有無」のクロス集計分析の結果を示しておく。カイ二乗検定の結果、「学校への義務感」によって「欠席日数の有無」に有意な差があった。具体的には、学校を欠席・遅刻・早退することに対して、「欠席・遅刻・早退するのはよくないと思っていた。」「特に何も思わなかった。」場合に「欠席なし」が多く、「どうしても欠席遅刻早退したいのならしても仕方がないと思っていた。」では、「欠席なし」がやや上回るも同程度、「欠席遅刻、早退したいときはそうして当然だと思っていた。」の場合は「欠席あり」がおおくなった。 ( $\chi^2(1)=6.893, p < 0.079$ )。

表46 「学校への義務感」と「欠席日数の有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		欠席日数の有無		合計
		欠席あり	欠席なし	
学校への義務感	欠席・遅刻・早退するのはよくないと思っていた。	6	16	22
	どうしても欠席・遅刻・早退したいのなら、しても仕方がないと思っていた。	15	17	32
	欠席・遅刻・早退したいときは、そうして当然だと思っていた。	4	1	5
	特に何も思わなかった。	2	7	9
合計		27	41	68



#### (4)親との距離感と不登校行動との関連

「親との距離感：父」をはかる「問 10.中学 2 年生のころ、お父さんと一緒に居るとなんとなく安心できると思っていましたか。」という項目と「不登校行動」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「親との距離感：父」によって「不登校行動」によって有意な差があった。具体的には、父と居るとなんとなく安心できるかについて、安心できると思っていた場合について、不登校行動において「それでも出席した」という場合が多い傾向にあった ( $\chi^2(1)=15.721, p<0.067$ )。また、母との距離感をはかるための質問項目である「問 11.中学 2 年生のころ、お母さんと一緒に居るとなんとなく安心できると思っていましたか。」と「登校回避感情」( $\chi^2(1)=8.262, p<0.522$ )「不登校行動」( $\chi^2(1)=6.990, p<0.637$ )「欠席日数」( $\chi^2(1)=0.587, p<0.974$ )には、いずれも有意な差が確認されなかった。表 47 に、「親との距離感：父」と「不登校行動」のクロス集計分析の結果を示しておく。

表 47 「親との距離感：父」と「不登校行動」クロス結果

クロス表

度数		不登校行動				合計
		それでも一度も休んだことはなかった。	遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。	休んだことがあった。	遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。	
親との距離感：父	そう思っていた。	13	0	4	1	18
	どちらかといえばそう思っていた。	13	3	2	1	19
	どちらかといえばそうは思わなかった。	5	4	6	1	16
	そうは思わなかった。	7	1	1	3	12
合計		38	8	13	6	65

#### (5)先生との距離感と不登校行動との関連

「先生との距離感：付き合い方」を尋ねる「問 13.中学 2 年生のころ、あなたは担任の先生とどのような付き合い方をしていましたか？」の結果と「登校回避感情の経験有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「先生との距離感：付き合い方」によって「登校回避感情の経験有無」に有意な差があった。具体的には、先生との付き合い方において、「自分の個人的な悩みを打ち明けたり、相談できるような関係だった。」「悩みの相談をしないが、勉強のことなどでは相談する関係だった。」「相談するほどではないが、気軽に話をする関係だった。」という回答選択肢のように先生との距離感が近いとされる場合に登校回避感情の経験頻度は少なくなり、反対に「挨拶する程度の関係だった。」「できることなら話をすることは避けたかった。」という回答選択肢のように先生との距離感が遠いとされる場合について、登校回避感情を経験しやすい傾向にあった ( $\chi^2(1)=21.597, p<0.038$ )。表 48 は「先生との距離感：付き合い方」と「登校回避感情の経験有無」のクロス集計分析の結果を示したものである。

表 48 「先生との距離感：付き合い方」と「登校回避感情の経験有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		登校回避感情の経験有無				合計
		よくあった。	時々あった。	たまにはあった。	全く無かった。	
先生との距離感：付き合い方	自分の個人的な悩みまで打ち明けたり、相談できるような関係だった。	0	3	2	1	6
	悩みの相談はしないが、勉強のことなどでは相談する関係だった。	0	3	1	1	5
	相談するほどではないが、気軽に話をする関係だった。	1	6	17	9	33
	挨拶する程度の関係だった。	5	9	2	4	20
	できるなら話をすることは避けたかった。	1	2	0	1	4
<b>合計</b>		7	23	22	16	68

(6)友達との距離感と不登校行動との関連

「友達との距離感：付き合い方」を尋ねる「問 15. 中学 2 年生のころ、あなたは友達だと思っている人と、どのような付き合い方をしていましたか？」の項目と「欠席日数の有無」についてクロス集計分析を行った。カイ二乗検定の結果、「友達との距離感：付き合い方」によって「欠席日数の有無」に有意な差があった。具体的には、友達との付き合い方において、「お互いに悩んでいることなどを打ち明けたり、相談し合ったりしていた。」「悩みを打ち明けたりすることはないが、よく遊んだり話をしたりした。」という回答のように友達との距離感が近かった場合は「欠席なし」が多く、「付き合いはするけれども、特に近いとは言えない付き合い方をしていた。」という回答のように友達との距離感があまり近くない場合に「欠席あり」が多くなった。(χ<sup>2</sup>(1)=5.076 p<0.096) この結果は森田(1991)の調査と同様の結果となった。表 49 に、「友達との距離感：付き合い方」と「欠席日数の有無」のクロス集計分析の結果を示す。

表 49 「友達との距離感：付き合い方」と「欠席日数の有無」クロス結果

**クロス表**

度数

		欠席日数の有無		合計
		欠席あり	欠席なし	
友達との距離感：付き合い方	お互いに悩んでいることなどを打ち明けたり、相談し合ったりしていた。	10	18	28
	悩みを打ち明けたりすることはないが、よく遊んだり話をしたりしていた。	12	22	34
	付き合いはするけれども、特に親しいとは言えない付き合い方をしていた。	5	1	6
<b>合計</b>		27	41	68

図1にこれまで述べた有意な差が確認できた独立変数と従属変数との関係について示す。

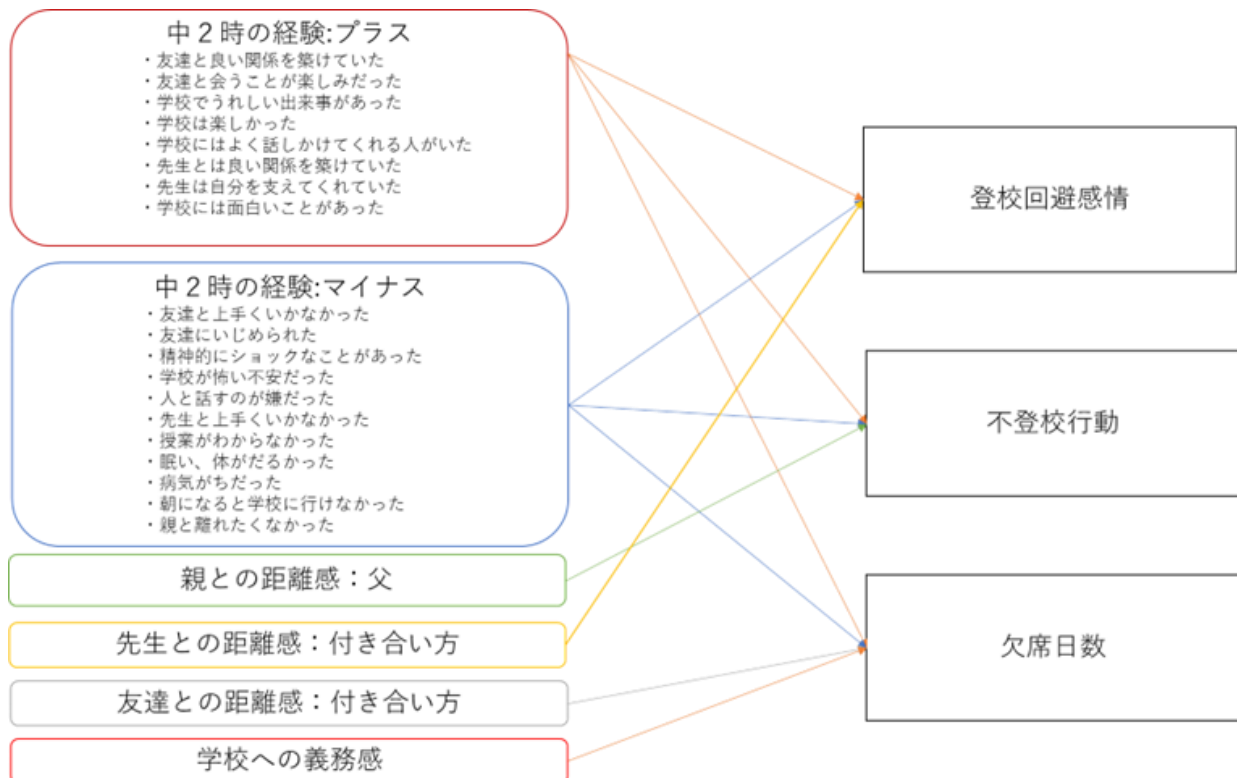


図1 有意だった独立変数と従属変数

#### 4 考察

「問 5.あなたは、中学2年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありましたか。」に対する結果によれば、頻度の多少を問わないと、登校回避感情を経験したことがあった人は、全体のうち 76.5%におよび、森田(1991)の調査結果で、全体の 70.8%であったことと比較すると、増加していることが明らかになっていた。この結果は、文部科学省の調査(文部科学省 2023b)から示されるような、現代の不登校児童の増加と関係していると考えられるのではないだろうか。登校回避感情の経験の有無を尋ねる「問 5.あなたは、中学2年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありましたか。」と不登校行動を尋ねた「問 7.前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどうしましたか。」でクロス集計分析を行うと、カイ二乗検定の結果、「登校回避感情の経験の有無」と「不登校行動」に有意な差があった。具体的には、「登校回避感情」を経験した場合について、不登校行動で遅刻や早退、欠席という行動をとりやすい傾向にあった ( $\chi^2(1)=16.279, p<0.057$ )。このことから登校回避感情を経験した人が増加したことによって、不登校児童も増加したと考えられる。

また、「問 9. 学校へ行くのが嫌で休んだのは、中学2年生のころ、合計で何日ぐらいありましたか。」に対する結果の際に、登校回避感情を示す出席生徒が約 25 名いるのではないかと述べたが、この点についてさらに詳しく考えたい、森田(1991)の研究のなかでは、「登校回避感情を示す出席生徒」に加えて「登校回避感情のない出席生徒」「欠席だけの不登校

生徒」「遅刻早退だけの不登校生徒」「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」という分類があった。この分類にあわせて、本調査における「問5.あなたは、中学2年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありましたか。」と「問7.前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどうしましたか。」の回答を組み合わせて分類を行ってみた。「問5.あなたは、中学2年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありましたか。」で「4.全く無かった。」かつ「問7.前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどうしましたか。」で「問1.それでも一度も休んだことはなかった。」と答えた人を「登校回避感情のない出席生徒」、 「問5.あなたは、中学2年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありましたか。」で「1.よくあった。」「2.時々あった。」「3.たまにはあった。」のいずれかの回答かつ「問7.前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどうしましたか。」で「1.それでも一度も休んだことはなかった。」と回答した人を「登校回避感情を示す出席生徒」、 「問5.あなたは、中学2年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありましたか。」で「1.よくあった。」「2.時々あった。」「3.たまにはあった。」のいずれかの回答かつ「問7.前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどうしましたか。」で「2.遅刻や早退をしたことがあるが、休まなかった。」と回答した人を「登校回避感情を示す遅刻早退のみ生徒」、 「問5.あなたは、中学2年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありましたか。」で「1.よくあった。」「2.時々あった。」「3.たまにはあった。」のいずれかの回答かつ「問7.前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどうしましたか。」で「3.休んだことがあった。」と回答した人を「登校回避感情を示す欠席だけの生徒」、 「問5.あなたは、中学2年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありましたか。」で「1.よくあった。」「2.時々あった。」「3.たまにはあった。」のいずれかの回答かつ「問7.前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどうしましたか。」で「4.遅刻や早退をしたこともあるし、休んだこともあった。」と回答した人を「登校回避感情を示す欠席と遅刻早退を示す生徒」、 「問5.あなたは、中学2年生のころ、学校へ行くのが嫌になったことがありましたか。」で「4.全く無かった。」かつ「問7.前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどうしましたか。」で「3.休んだことがあった。」と答えた人を「登校回避感情のない欠席生徒」と分類してみた。質問内容の違いから、当分類では新たに「登校回避感情のない欠席生徒」が出現した。表50に前述の分類をまとめたものを示した。「問9.学校へ行くのが嫌で休んだのは、中学2年生のころ、合計で何日ぐらいありましたか。」に対する結果の仮定通り「登校回避感情を示す出席生徒」は25名となった。森田(1991)の調査では、「登校回避感情のない出席生徒」が全体の29.4% 「登校回避感情を示す出席生徒」が45.6% 「欠席だけの生徒」が8.8% 「遅刻早退だけの不登校生徒」が8.7% 「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」7.5%であった。まったく同じ項目ではないが、比較をしてみると、「登校回避感情を示す出席生徒」の割合が最も多くなる点において一致していた。また、森田の調査時より登校回避感情をもち実際に遅刻や早退、欠席等の不登校群とされる割合がやや増加していることも明らかになった。これらの点から森田の通り、不登校問題では潜在群の存在が要になると考えられ、長期欠席に対する大きな枠組みに捉えきれない暗数部分が不登校児童数の増加の解決策を考えるうえでも着目すべきポイントになると考えた。

表 50 本調査における森田の分類

		Q5+Q7			
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	登校回避感情なし欠席	2	2.9	3.1	3.1
	登校回避感情なし出席	13	19.1	20.0	23.1
	登校回避感情あり出席	25	36.8	38.5	61.5
	登校回避感情あり遅刻早退	8	11.8	12.3	73.8
	登校回避感情あり欠席	11	16.2	16.9	90.8
	登校回避感情あり遅刻早退欠席	6	8.8	9.2	100.0
	合計	65	95.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	4.4		
合計		68	100.0		

「問 8.中学校 2 年生のころ、あなたは遅刻・早退・欠席についてどのように考えていましたか。」に対する回答の単純集計の結果について、森田(1991)の調査と比較すると「3.欠席・遅刻・早退したいときは、そうして当然だと思っていた。」という回答選択肢以外で大きく異なる結果となっていた。この結果は、学校へ行くことに対する価値観のゆらぎが関係の揺らぎが関係していると考えられる。森田は現代の不登校には学校を絶対視する価値観の揺らぎがあるという(森田 1991)。「問 8.中学校 2 年生のころ、あなたは遅刻・早退・欠席についてどのように考えていましたか。」に対する結果はまさに調査時から現代にかけて徐々に学校への、休むことに対する意識の変化か差が生じたのではないかと考える。

また、今回の調査では「問 16.あなたのクラスで中学 2 年生のころ、いじめがありましたか?」と「問 17.その時、あなたはどのようにしていましたか。」という設問で尋ねた「いじめの有無」と「登校回避感情」( $\chi^2(1)=0.575$   $p<0.950$ )、「不登校行動」( $\chi^2(1)=3.500$   $p<0.329$ )、「欠席日数の有無」( $\chi^2(1)=0.075$   $p<0.802$ ) また、「いじめ:自身の立場」と「登校回避感情」( $\chi^2(1)=19.314$   $p<0.175$ )、「不登校行動」( $\chi^2(1)=17.442$   $p<0.318$ )、「欠席日数の有無」( $\chi^2(1)=6.527$   $p<0.271$ ) とはいずれも有意な差を確認できなかった。しかしながら、「問 6.あなたが中学 2 年生のころ、経験したことのある感情について、あてはまるものすべてを選択してください。」の項目である「中 2 時の経験:友達にいじめられた」と「登校回避感情の経験有無」に対するクロス集計分析で有意な差が確認され( $\chi^2(1)=16.030$ ,  $p<0.003$ )、「中 2 時の経験:友達にいじめられた」を経験した場合について、登校回避感情を経験をしやすい傾向にあることがわかった。このことから今回の調査では、有意な差を確認できなかったが、無視できる項目ではないと考えられる。文部科学省によると、いじめは令和 4 年度、前年からその件数は増加しており、中学校では 11 万 1404 件発生しているという(文部科学省 2023b)。さらにいじめはいじめを認知していない学校に対する懸念もあり、学校問題を研究する際には考えねばならない点となると考える。本調査において、十分に「いじめ」と「不登校現象」をとらえきれなかったが、今後の研究で森田の研究からの変化、そして、さらに詳しく。いじめと不登校の関係が明らかになることが期待される。

そして、クロス集計分析の結果により、「中 2 時の経験:友達と良い関係を築けていた」と「登校回避感情の経験有無」および「不登校行動」、「中 2 時の経験:友達と会うことが楽しかった」と「欠席日数の有無」、「中 2 時の経験:学校でうれしい出来事があった」と「不

「登校行動」および「欠席日数の有無」、「中2時の経験：学校は楽しかった」と「登校回避感情の経験有無」および「不登校行動」および「欠席日数の有無」、「中2時の経験：学校にはよく話しかけてくれる人がいた」と「不登校行動」および「欠席日数の有無」、「中2時の経験：人と話すことが好きだった」と「登校回避感情の経験有無」および「欠席日数の有無」、「中2時の経験：先生とは良い関係を築けていた」と「不登校行動」および「欠席日数の有無」、「中2時の経験：先生は自分を支えてくれていた」と「欠席日数の有無」、「中2時の経験：学校には面白いことがあった」と「欠席日数の有無」で有意な差があることが分かった。これら、どの経験と従属変数の関係においても、ポジティブな感情を経験していると、登校回避感情や不登校行動、欠席日数が減り、反対にこのようなポジティブな感情を経験していない場合は登校回避感情も経験しやすく不登校行動、欠席日数増えるということが明らかになった。この「問4.あなたが中学2年生のころ、経験したことのある感情についてあてはまるものすべてを選択してください。」の回答選択肢の項目は森田において、登校回避感情そして不登校行動のきっかけとなる状況要因として考えられる今回行った調査の「問6.あなたが中学2年生のころ、経験したことのある感情について、あてはまるものすべてを選択してください。」の回答選択肢の内容を、反対にしてみると登校回避感情そして不登校行動が発生しにくくなるのかという仮説のもと設定した質問項目であった。結果をみると、この仮説通り、森田の調査における不登校理由の反対の経験をする、登校回避感情や不登校行動、欠席日数が少なくなると考えることができた。

また、クロス集計分析より、「中2時の経験：友達と上手くいかなかった」と「登校回避感情の経験有無」および「不登校行動」、「中2時の経験：友達にいじめられた」と「登校回避感情の経験有無」、「中2時の経験：精神的にショックなことがあった」と「登校回避感情の経験有無」、「中2時の経験：学校が怖い不安だった」と「登校回避感情の経験有無」、「中2時の経験：人と話すのが嫌だった」と「不登校行動」「中2時の経験：先生と上手くいかなかった」と「登校回避感情の経験有無」、「中2時の経験：授業がわからなかった」と「登校回避感情の経験有無」、「中2時の経験：眠い、体がだるかった」と「不登校行動」および「欠席日数の有無」、「中2時の経験：朝になると学校に行けなかった」と「登校回避感情の経験有無」および「不登校行動」、「中2時の経験：病気がちだった」と「不登校行動」、「中2時の経験：親と離れたくなかった」と「登校回避感情の経験有無」で有意な差があることが分かった。この問いは前述の通り、登校回避感情そして不登校行動のきっかけとなる状況要因として設定したものであり、その前提通りこのような経験をしていると、登校回避感情の経験そして不登校行動、欠席日数が発生しやすいということが本調査においても明らかになり、森田の研究を補強する結果となったと考えられる。

親との距離感をはかる調査に関する結果では、「問10.中学2年生のころ、お父さんと一緒に居るとなんとなく安心できると思っていましたか。」と不登校行動を尋ねる「7.前問でお答えいただいた経験をしたとき、あなたはどうしましたか」との関係のみ有意な差があった。このクロス集計表は森田(1991)の調査と比較して概ね同じ割合であったが、本調査では、「どちらとかといえばそうは思わなかった。」と「休んだことがあった。」の項目の件数が多くなっていたことが目立つ結果であった。また、森田(1991)では不登校群の生徒は出席群の生徒に比べて教師と付き合い方が希薄である生徒多い傾向にあった。本調査では、「先生との距離感：付き合い方」によって、不登校行動との有意な差は確認できなかった ( $\chi$



2(1)=10.983,  $p < 0.533$ ) が、登校回避感情と不登校行動の関係をふまえると、本調査でも森田の通り、教師とのコミュニケーションが停滞していると登校回避感情が増え不登校行動につながると考えることができた。この結果はスクールボンド理論を裏付ける結果といえる。ボンド理論とはハーシィが提唱した理論で、人は社会的な絆の強弱によって逸脱行動を押しとどめたり、反対に逸脱行動に走るという理論である。中学二年生のころ経験した感情でも友達関係の回答数が目立った。このような本調査での友達関係そして、先生との関係、親との関係の結果はスクールボンド理論を裏付けるものになったのではないかと考える。

## 5 結論

本稿では、不登校児童の人数が10年連続で増加し、コロナ禍で問題が再注目されている大きな社会問題の一つである不登校の問題について、その要因を明らかにすること、また、森田(1991)の『不登校現象の社会学』の調査時から現在にかけて不登校問題にはどのような変化があるのかについて明らかにすることを目的として研究を行った。調査では、森田の研究をもとに、独立変数と従属変数設定し、68名の回答集めた。結果として、改めて、現代の不登校問題でも「登校回避感情を示す出席生徒」のようなグレイゾーンの存在に着目する重要性があることが明らかになり、また、当調査でわかった登校回避感情や不登校行動の要因との関係によって、さらに森田の研究内容を補強することができた。そして、単純集計において、学校に対する義務感のゆらぎが変化していることをはじめとした森田の調査時からの変化についていくつか新たにわかった。さらに、学校に関連するマイナスな感情の経験と不登校現象の関係は森田の研究でも明らかになっていたが、学校に関連するポジティブな感情の経験の有無と不登校現象との関係を当調査で新たに明らかにすることができた。一方で本稿では、いじめと不登校現象の関係を明らかにできなかったというような不十分な点もあり、今後の研究で、いじめと不登校現象との関係には、森田の調査時点からどのような変化があるのかについて、新たな知見が発見されることが期待される。

### [文献]

- 小柴孝子, 2017, 「不登校発生の背景要因に関する研究」『家族心理学研究』31(1): 43-55.
- 文部科学省, 2023a, 「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果及びこれを踏まえた緊急対策等について (通知)」, 文部科学省ホームページ, (2023年12月27日取得, [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1422178\\_00004.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422178_00004.htm)).
- 文部科学省, 2023b, 「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要」, 文部科学省ホームページ, (2023年12月27日取得, [https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt\\_jidou01-100002753\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_2.pdf)).
- 森田洋司, 1991, 『「不登校」現象の社会学』学文社.